

2012 年 8 月 1 日

リーダー会承認

2012 年西吾妻連峰「大沢下り」一時遭難事故についての報告

期日：平成 24 年 3 月 31 日～4 月 2 日

場所：山形県西吾妻連峰

メンバー：中村孝 C L 人見邦明

概要：同年 4 月 1 日天元台スキー場から入山、中大・明月荘をへて山スキーコース「大沢下り」途中で道に迷い同日夕からビバーク。翌朝大沢駅付近に自力下山、タクシーで米沢駅に向かう際、中村家人から捜索届を受けてパトロールしていた米沢警察署員に保護され、同署地域課で事情説明した。

会の対応：別稿に譲ります。

事実経過：

1. 3 月 31 日午後上野発の新幹線とバスで白布温泉着。5 時ごろロープウェイでホテル「アルプ天元台」に投宿。当日は人見の定年退職の辞令交付日だったので、夕食は定年祝いの小宴になる。
2. 7 時頃起床、食堂で朝食後準備して出発。8 時半ころ、営業開始を待つ乗車。第 2 リフトがまだ動いていないのでグレンデを 2 本滑る。営業開始を待ち、リフトを乗り継いで第 3 リフト山頂着。スキーにシールをセットし 9 時頃歩行開始。他に夫婦らしきペアがスノーシューで、地元の単独男性（50 歳ほど）が山スキーシール歩行を始める。その男性は明月荘から沢伝いに大平温泉に下るといふ。
3. 上記単独男性と同じ方向なので前後する。中大・人形岩は我らが先頭で通過する。ここで小休止をとる。微風、曇天だが展望は概ね良好。下りは安全のためシールを付けたまま明月荘を目指す。
4. 藤十郎山頂をへて雲を抱いた東大を確認、明月荘方面に下る。上記男性は山頂を経ず平地沿いに歩いている。広い雪原をそのまま直進していくと、明月荘の小屋が視認でき、迷うことなく同小屋に到着 11 時ころ。同所で長めの休憩をとる。シールを外し、早め下山して米沢駅で打ち上げをしようなどと話す。宿でいれてきた魔法瓶のコーヒーを楽しむ。
5. 目指す方向に黄色い道標を確認する。人見はコンパスを持参していない。そこを右方向に進むが、本コースに戻るべく左にトラバースし、尾根伝いに下る。道標は確認できないがそのまま尾根を外さないように下って進む。
6. 尾根を進むうちにかなりの急斜面の上部に出る。ここを滑るのは危ないのでスキー板を外し、ツボ脚で下降する。斜面はさらに急になり、木の根や枝を掴んで下る。崖の上

に来てしまい、中村はそこから 5 分ほど飛び降りる。雪に埋まりってしまいしばらくもがいて脱出する。この間言葉がないため、人見は大声で叫び「無事だ」の返答が帰って来て一安心する。人見はこの斜面を下るのは無理なので登り返してややなだらかな斜面を探してくだり中村と合流する。見上げると大きな岩がそそり立っていて、ここが「立岩」であることを確認する。小休止して気持ちを落ち着かせる。ここで黄色い道標がありここが正コースであることを確認する。かすかなスキートレースも確認できる。

7. 立岩からトレースに従って林道のような平地を辿る。そのうちにそのコースが登り勾配になってくる。人見が「俺たちは大沢下りに来たのになぜ登るの？」と疑義をいう。ふたりでそれじゃあ戻ろうということになり、先刻の道標のまで戻る。逆の方向に下るトレースがありそのルートを進む。トレースは尾根の斜面で二手に分かれているが、両方とも途中で消えている。おかしいと思いつつも左のトレースの先に下って進む。尾根を外さないように注意しつつ下る。

8. 立岩をすぎると、「砂盛」という地点、さらにその先は「忠ちゃんころがし」という急な下りになるはずだがそれを確認しないまま下り続ける。そのうち沢沿いに下りってしまい、ラッセルして対岸に渡たりして、北方向に進めという中村の指示に従う。数回沢の流れの中に入り、その都度ラッセルで急斜面を登り返す。疲れてきた人見が「沢沿いに降りましょう」という。その通りに下ると滝のような急斜面に出くわし、それを避けてまたラッセルをしない。現在位置が確認できないまま時間は過ぎる。

9. 5時半頃か、小さな沢の左岸にスノーブリッジを越えて下って行くと滝の上に出てしまう。無理と判断して戻り返す。少し休んでからまた尾根を下る。6時すぎヘッドランプを点灯。体力の消耗を感じる。小さな窪みでも転び、起き上がる脚力も弱くなり、外れた靴をセットし直すのに難儀する。暗くなり口にはしないが人見は不安を募らせていく。中村は北方向に進めば大沢駅、奥羽本線に着くはずだという。しかし現在地を確認できないまま、左右に沢が切れ込んでいる中尾根を下っていく。その尾根が急に落ち込む地点に出てしまう。その先へ行けば沢の出合いまで落ちてしまう危険がある。既に暗闇で窮地になっていることを実感する。どちらからともなく話し、「ビパークしましょう」と一致。7時半、急斜面上部でビパークを始める。

10. ツェルトを持参していないので雪洞を作り一夜を凌ぐことにする。スキー板を外しその先や素手で雪をかきだし、ブーツでそれを蹴散らし整地する。運良く、月明かりや星も瞬いて風もない。体を動かしているときは暖かいが、それをやめると寒くなる。空腹感はない。飲み物はスポーツ飲料 500CC のペットボトルに少し残っている程度。2時間半ほどで雪洞らしくなってくる。それに入り無言でうずくまる。時折煙草を吸って気持ちを落ち着かせる。雪洞をもっと大きくという人見の提案でそばの穴をまた掘り返す。「二軒ぶんの雪洞だな」などという。

11. 2 つめの雪洞もできたのでその中に入る。人見はスキー板を並べてその上に寝そべる。中村は膝をかかえてうずくまる姿で夜を過ごす。遠くで小動物の鳴き声も聞こえる。12

時半を確認するが、その後は時計を見ないようにする。寒さを防ぐべく目出帽を被り、手袋2枚重ね、アウターシェルを重ね着してもじっとしていると下肢が寒い。スキーカバールを足に掛け、靴の中で足指を動かす。チーズとサラミソーセージを少々かじる。人見はきれいな雪を口にいれて水分をとる。高度計は 500 ｍを指すが、地形図で現在地を探そうとするが確定できない。1 時間ごとに喫煙、小水 2 回、その都度屈伸運動する。人見は 2 時半から 4 時過ぎの時間が早かったように思う。その時いびきをかいていたと中村はいう。

- 1 2. 午前 5 時前から白んでくる。5 時半起床、行動開始。板をつけシールもしっかり付ける。とりあえず昨夜のルートを登り返し、進路を北方向にとることを考える。沢には下らざるべく尾根伝いに歩く様にする。大きな針葉樹がある台地状の所へ行く。牧場とも思えるが確認できず。尾根にあがり地形確認するがよく分からない。そのうちややなだらかな森のような所をくだり。登山道のような所を北方向に行く。
- 1 3. 送電線を見つける。その方に進むとその鉄塔も確認する。沢を渡るところに黄色い表示板を見つけ、鉄柱への保守工事用の道標のはず。その通りそこが林道だった。トレースもありそこを忠実に下ればいい。やがて家屋もみえ、9 時ごろ奥羽本線の線路に出る。新幹線つばさが走っている。
- 1 4. 自動販売機でジュースを買いたい却不是。線路のガード前の民家（近藤宅）にお邪魔しタクシーを呼んでもらう。玄関先で話すと親切にコーヒーと漬け物を出して下さる。空腹感はないがとてもおいしい。10 時ごろ米沢タクシーが来て米沢駅に向かう。その道中、前から来たパトカーが引き返してきてタクシーを停車させた。
- 1 5. 警察官が我らを呼び人名確認、搜索願が出されているふたりであることを確認。米沢警察署生地域課に赴く。事情聴取したあと平身低頭して署を辞す。再度タクシーで米沢駅。公衆電話で家族と貝原会員に連絡する。空腹を覚えそばを食べ弁当を買い、11 時過ぎの新幹線で帰京する。

付記：翌日の山形新聞に実名で「西吾妻連峰で 2 名一時遭難」の記事が掲載された。

反省点：

- ツェルト・コンパスを忘れ、水や食料、燃料の予備を持たず装備が杜撰だった。
 - ネットで見た道標に頼りすぎたが、それが 2 回しか確認できなかった。
 - 互いの意思疎通不足というか、ほとんどなかった。相手に頼りつきりだった。
 - そのため分岐で現在地確認を怠ることになった。なによりもテキトウに、気楽に考えていた。
 - ふたりとも携帯電話を持たない人間だった。
 - 運良く天候に恵まれ、ふたりとも平常心を保ってビパークできたことは評価される。
- 会員の皆さまには多大なご心配をおかけいたしました。深く陳謝いたします。

中村孝 人見邦明

吾妻連峰 「大沢下り」 インシデントについて

事故原因分析

《主な経過》

1. 明月荘から「忠ちゃん転がし」に至るツアールートで小雪、視界不良により分らなくなり、正規ルートを外れ「立岩」方向にルートを取った。
2. 「立岩」を過ぎてから、かすかなトレースを発見し、そのトレースに従って「立岩」東側の沢沿いを滑降した。
3. 中継地点の「忠ちゃんころがし」や「砂盛り」が見つからなかったことにより、現在地点がどこなのか掴めない状態に陥った。
4. トレースが消え、ルートミスに気づいたときは、スキー滑降ということで相当下まで下りてしまって、引き返しが難しい状況に陥った。
5. 上り下りを繰り返しているうち体力を消耗し、夕刻となりビバークを余儀なくされた。
6. 結果として正規ルートとほぼ平行にルートを通っており、自力で下山できた。

《事故原因》

この事故発生のポイントは 1.と 2.であると考えます。

いずれの判断も地図やルート図より、経験や勘を優先してルートを選定したことがこの事故を引き起こすことに繋がった。

ルートを決める際の情報が乏しく、相互（パーティ）の見解相違一致作業は無かったように見受けられ、全てリーダーに一任されてしまっていることも課題として挙げられる。

以下に 1994 年の遭難事例を記す。

今回の事故も底流には、いくつか同様の原因が潜んでいるように思います。

以上

過去の遭難事例

1994 年吾妻連邦 スキーツアー遭難（山溪 2012 年 2 月号から）

1994 年 2 月 11 日から 13 日にかけての連休は南岸低気圧が発生しながら急速に通過し、強い冬型の気圧配置となった。8 都県で 11 件の山岳遭難が発生し、30 人が遭難状態に陥った。

なかでも悲劇的な結末を迎えたのは吾妻連峰に入山したパーティで 7 人中 5 人が低体温症により亡くなってしまった。

このパーティは、家形山から霧ノ平経由で滑川温泉まで山スキーで縦走する予定であった。

リーダー(68)はこのコースを何度か訪れていた。11 日に吾妻スキー場から入山し、この日は家形山避難小屋に宿泊している。翌日は 8 時過ぎに出発し、家形山からの尾根に予想外の時間がかかって合流する。白浜から霧ノ平に向かうが、滑川温泉への下降点がよくわからず、稜線をさまよううちに 16 時、ビバークとなった。

翌 13 日は吹雪。雪洞の外に出ると強い風が吹きつけてきた。しかし行動できないほどとは考えず、8 時に出発する。

滑川温泉に行くのは無理と判断し、家形山避難小屋へ戻ろうとするが、尾根の上は強い風が吹いており、それを

避けようと風下である尾根の東側をたどる。しかし、今度は深い雪に足を取られ、遅々として進まなくなってしまった。

このままでは避難小屋にたどり着かないと思い、ラッセルでできたトレースをいったん戻り、今度は尾根の上を行こうとする。しかし、強風にあおられて体力を消耗し、やがて一人遅れ始め、動けなくなる。その仲間を助けようとしてほかのメンバーも疲労してしまい、パーティが行動不能な状態に陥ってしまった。

この時点で 2 度目のビバークを決意するのだが、雪洞を掘ろうとしても雪が固く、また木の根や岩がすぐ出てきてしまうような条件の悪いところだった。しかもスコップがないので、コッヘルで掘るしかない。4 ヶ所に雪洞を作ったが、深さ 30cm 程度の穴だったり、下半身が出てしまうような貧弱なものしかできなかった。雪洞を作っている最中にもメンバーが次々と弱りだし、翌朝、意識があったのは 3 人だけだった。

14 日。意識がある 3 人のうち、1 人は動ける状態ではなく、2 人が救助を求めて出発する。この日も風は強く、行動は困難を極めたが、滑川温泉に下る沢へ入ることができた。翌 15 日、滑川温泉にたどり着いたところを、旅館の人に発見される。そして 14 時過ぎに自衛隊のヘリコプターが現地に到着して救助したものの、すでに 5 人とも死亡していた。

*

悪天の中を行動中、1 人が動けなくなったがためにパーティ全員が停止する。倒れた仲間の面倒を見る間に体が冷えて、さらに動けなくなるメンバーが増える。

1 パーティから大量の死者を出す典型的なパターンに、吾妻連邦の事故も当てはまると言えよう。

リーダーは長い山スキー歴をもち、24 年間毎年同じルートに悪天でも通い続けた。

多くの初心者を案内し、ともに山を楽しんでいた。幸いにも事故は起きなかったが、その経験が逆に過信につながったともいえる。

ツェルトやスコップ等装備の不備もあった。そんな状態でも通い慣れているところでは何とかなった。小さなアクシデントもあったが、何とかなる「幸運」に恵まれていた。だがそんな無事故が長く続いている認識が「教訓」として積み重ねにならず、今回のような大きな事故につながってしまった。

また、強いリーダーシップを持つ人物が率いるパーティでは、メンバーはリーダーに依存しがちだ。今回、強いリーダーが力尽き、メンバーに現場判断が求められたとき、充分なことができたとはいえない。各人が自立した登山者として参加していれば、いざという時の判断も変わっていただろう。

山行は行く前から始まっている。装備やルートなどは、それぞれが認識すべきだろう。

楽しさだけを求め、安全を他人にゆだねたとき、風雪のなか厳しい状況下で後悔しても、すでに手遅れなのである。

○2012,8,1 リーダー会議事録

1、開催日時 2012,8,1 19:00～20:10

2、場所 北ピア8F 会議室

3、出席者 加藤代表、稲垣夫妻、笹田、中村、阿部、山田、高橋、湊、谷口（記）
欠席者のうち議事委任者 萩原

4、議事

(1) 加藤代表を議長に選任し、本日の議題である「2012,3,31～4,2 の吾妻連峰大沢下り一時遭難事故について」のレビューおよび今後の対策について審議した。

(2) 報告書のレビュー

① 中村より以下の通り説明があった。

- ・ 報告書 6 項に関し、「立岩」が本来のルートではないことは知っていた。現在地確認のため本来のルートを外れていることは知ったうえで「立岩」に向かった。
- ・ 報告書 8 項に関し、「忠ちゃんころがし」を過ぎてから「砂盛」に向かうルートであることは分かっていた。報告書は人見が作成し確認したが、当該部分の記述の修正は、改めて会の検証の席で行なおうと考えていた。
- ・ 確認しようとしていた道標は赤と黄色のツア-道標。
- ・ 核心は、報告書 7 項の箇所、「立岩」からトレースに沿って進んだこと。トレースが消えた時には既に進みすぎて「立岩」に戻ることが困難な状況だった。

② 出席者の意見

- ・ 報告書は正確にかつ速やかに作成し提出されるべき。かつ、報告に対する会の検証手続きも速やかに行なわれるべき。関係者を慮って、事実確認が疎かにされるようなことは厳に慎むべきである。
- ・ 後輩が報告書を読んで、なんでこういう事態になったか、事態が伝わるように書いて欲しい。

(3) 今後の対策について

① 加藤代表が「遭難対策マニュアル（案）」を説明し、会則に従って規則としてルール化することを提案した。

- ・ 特段の意見はなかった。

② 出席者の意見

- ・ 下山の確認が漏れていた。緊急連絡先の会員が第一に確認すべき事項。
- ・ 予め家族には緊急時の対応を伝えておくべき。
- ・ 警察と地元山岳会の対応は違う。今回、警察は家族からの一報で既に遭難を前提とした行動に入っていた。
- ・ もっと連絡が迅速かつ的確に行なわれるような工夫が必要。今回の件も、

仮に携帯電話を持参していれば、もっと早い時点で状況の連絡ができ、こんな騒ぎにはならなかったはず。いまや、携帯電話は個人装備として必携とすべき。

- ・ 事故の要因を分析して、夫々の対策を検討する過程が必要では。

(4) 今後の取り組みについて

- ・ 報告書を改めて修正し再提出する。
- ・ 今回辿ったと思われるルートを地図に記載し、報告書に添付する。
- ・ 同報告書の提示後、今後の対策を再検討し、本件の決着を図る。

以上

行動記録		状況(天候、地形、体調など)		判断		行動	
月日	時間	当事者	周辺関係者	当事者	周辺関係者	当事者	周辺関係者
3月31日	1:00	上野駅「つばさ」乗車					
		米沢駅からバスに乗車					
		アルプ天元台 宿泊					
4月1日	7:00	朝食。					
	?	天候、おおむね良好					
	11:00	明月社で休憩					
	?	ツアー道標確認		ルートミスに気づく			
	?	立岩の上に出る		正規ルートに居ると思った?			
	?	立岩前で道標確認		ルートを見失う		沢沿いに下ったり、急斜面をウツセルしたり	
	?	その後道標確認できず。				北方向へ「向かう	
	?	疲労を感じ、焦りを覚える。				2本の沢が合流する中州の急斜面に雪洞を作る	
	19:30			ビバークを決定			
4月2日		月明かりと星が見えて穏やかな夜					
	5:30	行動開始。小雪				北へ北へと移動	
	?	尾根に上がって地形を見る		現在地確認できず			
	?	電線を見つける。また、晴れ間が出てくる。					
	?	黄色い表示板発見					
	?	沢を渡り、林道に出る。					
	9:00	集落に到着					
	?	捜索中のバトカーと遭遇					
	8:00		本山の緊急連絡者である貝原大輔氏の奥方雅美さんから中村、人見両氏の下山報告がないことのTEL受信。内容:中村氏奥方から緊急連絡者である貝原大輔氏に連絡あり、中村氏奥方から次の内容を聞く(大輔氏勤務のため不在)。 ①緊急連絡先に指定されていた貝原宅にTELがあったこと ②中村氏奥方が米沢警察署に連絡したこと ③3/31アルプ天元台宿泊に人見氏が宿泊を確認したこと (加藤代表)				
	8:00～8:30		加藤代表より中村、人見パーティーの下山が報告がなく、現地警察署に家族より捜索願いが出されたとの報告あり。稲垣進氏に連絡し(既に事態掌握済みであった)、私は準備出来次第稲垣邸に向かうむね伝える。 加藤代表には取り敢えず稲垣邸を捜索隊の集合場所にするようアドバイス。 (笹田)				北稜遭難救助担当の阿部さんにTEL、上記の件を伝える。連絡担当は私がやることの了解を得る。 (加藤代表)
			加藤代表より中村、人見パーティーの下山が報告がなく、現地警察署に家族より捜索願いが出されたとの報告あり。 (笹田)				稲垣進氏に連絡し(既に事態掌握済みであった)、私は準備出来次第稲垣邸に向かうむね伝える。 加藤代表には取り敢えず稲垣邸を捜索隊の集合場所にするようアドバイス。 (笹田)
							米沢警察署にTELL、中村氏奥方からのTEL確認と警察署の担当者を開き(地域課が担当とのみ聞く)、中村氏奥方がTELLした後の情報確認するが変化なし。 米沢市のタクシー会社5社に4/1乗車履歴を確認するが乗車形跡なし。 稲垣宅にTEL、山行コースの山様を聞くが確たる情報なし。 笹田宅にTELLし、4/3古賀志RCT中止のTEL、上記の状況を話したところ笹田氏はすぐに車で上京する。現地に行く場合は笹田車の使用、稲垣邸を対策本部する旨のアドバイスを受ける。 (加藤代表)
	8:50		中村氏奥方からTELあり、米沢市役所、山形県遭難救助隊の佐藤氏が捜索願いを出すかどうか確認したい、と言ってきたことを私に相談。 (加藤代表)				私は、米沢市役所、山形県遭難救助隊の佐藤氏にTELLし、8:30頃ヘリとバトカーの手配措置を聞く。 また、地上からの捜索は本日4/2は捜索員を集められず明日以降になることを佐藤氏から聞き、正式な捜索願い(口頭でOK)の提出は、午前中一杯様子を見ることにした。このことを中村さんの奥様にTELLし了解を得る。 ヘリの手配は、下からの捜索は人の手配の関係で翌日以降になるので、取りあえず上空からの確認とのこと。また、バトカーは下山した際、大沢駅で確保するための措置。 (加藤代表)
	9:40		現時点で下山していない事は底雪崩れに遭遇が予想され捜索が長期になることを想定して準備、車で出掛ける寸前に加藤代表より電話があり無事下山確認との報告を受ける。				稲垣さんに連絡、活動を終了する。 (笹田)
			米沢市役所、山形県遭難救助隊の佐藤氏からTEL、9:35両名を大沢駅のバトカーが確保したとの連絡。 すぐに、中村氏奥方にTEL、中村宅には既に警察から連絡があり知っていた。 この間、米沢タクシーから両者を乗せたとのTELが入る。 (加藤代表)				米沢警察署地域課にお礼のTEL。 関係者(稲垣、笹田、貝原の各氏)に無事下山の連絡。 (加藤代表)
	4月5日						改めて米沢警察署にTELL礼状を出すために地域課の担当、警察署長の名前を聞くが、不要との言葉とのことだったので甘んじた。 4月4日の集会において人見氏から報告を受けたので、4月6日米沢市役所、山形県遭難救助隊の佐藤氏にお詫ひとお礼の手紙を出す。 (加藤代表)

加藤の反省 1. 会として下山報告の管理体制が不備であった。・
4月1日(日)、下山報告がないことを見逃していた。4月2日中村さん奥方が緊急連絡先の貝原さん宅に「警察に連絡」のTELが入り、初めて下山してないことを知る。
3月31日、会として下山がないことに対する行動(中村さん、人見さん両家奥方に会として動くことの了解、情報収集など)をしていれば、中村さん奥方に警察への連絡をさせることがなかった。

2. 遭難に対する警察、地元山岳会と加藤の認識の違い
4月2日、地元山岳会から中村さん奥方に「正式な捜索願を出してほしい(TELで口頭でよい)」との要請があり、中村さん奥方から加藤にどのように対応したら良いかとの相談があった。
地元山岳会の要請を加藤が引き取り、地元山岳会に対して「正式な捜索願は正午まで待つてほしい」とお願いした。
「正式な捜索願」が出てから警察などの行動が始まるもの理解していたが、既にこの時点で警察へ、消防へ、駅・バトロールの行動がされていた。
警察は中村さん奥方の下山してないとの連絡により、実質的な遭難として捉えて行動を開始していた。「正式な捜索願とは」地元捜索隊の編成を行うためのものであることが後で分かった。

